

危険箇所 ①急な坂



私たちの担当エリアは北に行くにつれて徐々に上り坂になっていったが、道中の坂の傾斜がかなり急だった。私たちでも上るのに少し苦労するくらい急な勾配で、辺りが高い木々に囲まれており、かなり長い坂だった。また道路も狭く、すれ違う車は難儀するだろうと感じた。階段もなく、北に行くにはその長く急な坂道を歩くしかないという状態で、高齢者や小さい子どもにとっては負担が大きいだろうと思った。都農町全体として、曲がり道が多かったり信号や横断歩道が少なかったり、道路の設備が行き届いていないように感じた。また、この坂の周囲にはご年配の方が比較的多いため住民の方には不便場所ではないかと思った。畑仕事や農作業をしている人にとってももう少し楽に上れるような工夫ができないか見直すべきだと考える。周囲は山々に囲まれてとても自然豊かな場所だった。他と比べて標高が高い場所だったので空気が澄んでいて気持ちよかった。しかし標高が高くて川が氾濫したときに水害が発生する恐れがあるので対策が必要だ。（松尾）

③ニラ栽培農家の方の話



自宅の庭で、ビニールハウスを用いてニラを栽培している男性にお話を伺うことができた。育てたニラはJAに出荷されるという。ニラはまず3月に苗を植え、6月に定植を行うという。農業を行う上で困ることは何かを伺うと、まずは水害だという。都農は毎年比較的多い降水量が多く近くの川がよく氾濫するそうだ。この男性のビニールハウスは去年浸水に見舞われたそう

で、堤防の端や河道改修などの対策が必要だと考える。また、シカなどの野生動物が田や畑を荒らすことも問題だという。昼間にもよく出没するよう対策としてネットなどで防いでいるようだが解消には至っていないそうだ。お話を伺う前に子鹿を救出した現場に居合わせ、救出した男性がシカが可愛く助けないと可哀想だとおっしゃっており、シカなどの動物に対する農家の方々の意見と一般の方々の意見で違いがあることが分かった。また、農家にとって動物は害獣となる事がわかった。シカは可愛らしい一面がある一方、農家に被害を与える一面もあり、とても勉強になった。また、都農町の良いところを伺うと、果物や野菜がおいしくて安いところと人が優しいところだとおっしゃっていた。確かに、都農町の方々は誰に話しかけても早く対応してくださるため深く納得した。（大野）

危険箇所

②整備されていない細い道



道路の傍に、人工的に作られたように見える細い道があった。コンクリートで舗装されていたが、コンクリート上に草が生い茂り大きな竹が倒れていたりして危険な道になっていた。人が最近手入れしたとは思えず、雨が降ったりすると滑りやすくなり危険な場所になるだろうと考えた。傾斜もかなり急になっており、もし高齢の方などが通るとなるとかなり危険だろう。この道をこまま放置しておくと、大雨や台風などの災害の影響で余計に荒れてしまい、道がなくなってしまう可能性がある。今後、定期的にこの道を整備していった近隣住民の方が安全に下れる道にしていかなければならない。（瀬戸）

④ブドウ農家の方の話



住宅がほほい平坦な道を抜けた先には坂道があり下り始めてすぐのところで、大規模なビニールハウスでブドウ栽培を行う女性にお話を伺うことができた。ここで生産されるブドウは農協や道の駅、業者などに出荷されるという。農業をするうえで問題点は何かを伺うと、最近では生産資材の高騰による問題があるそうだ。高品質化が進んだり、天候不順による出荷減少なども問題として挙げられるのではないだろうか。このような事態に対して、共同購入や予約購入を進めたり、国や県などからの補助金制度を

整えるなど早期の対策が必要だと考える。この女性に都農町のいいところは何かを伺うと、人がみんな優しく、トラブルが少ないと仰っていた。この周辺ではこの女性ともう一件だけしかブドウを育てていないと知って少し意外だなと思った。都農町は都農ワインが有名なのを知っていたのでもっと多くの農家の方々がブドウを育てているイメージがあった。フィールドワークを行ったのが5月31日だったこともあり、ブドウの旬の時期ではなかったが、ブドウにビニールを張っていた。おそらく、病害虫や雨除けのためにビニールで覆うことで、病気に強い状態を作ったり、成長を早めたり工夫をしているのではない。フィールドワーク後に調べたことだが、ブドウは高温や日照不足で着色不良になることがあり、ビニールを張ることで環境を調整し、着色不良を防ぐことにつながるという。またブドウの果実が過剰な水分を吸収して裂けてしまう事を防ぐことにもつながるという。都農ワインをより高品質化していくために早い時期から様々な工夫をしていることがわかった。（瀬戸）

⑤慰霊碑



フィールドワークの終盤に慰霊碑を見つけた。日中戦争から太平洋戦争終結までの8年間で亡くなった15名への思いが綴られていた。このうち6名は兄弟だったそうだ。「『終戦記念日』から六四年の歳月が過ぎました。」と書かれていることから、この慰霊碑は約15年前に建てられたことがわかり、意外と新しいのだと知った。この慰霊碑が建てられた背景を知りたいと思った。どのような経緯で戦後から60年以上経ったタイミングで新たに慰霊碑を建てることにしたのだろうか。私はこの慰霊碑を見ても胸が痛くなり、私たちが今立っている町から15人もの尊い命が失われたのだという事実を決して忘れてはいけないと思った。15年前にこの慰霊碑を建てた人々も同じ気持ちで、この事実を後世に伝えようとしたのかもしれない。慰霊碑が直接的に都農町の振興や活性化につながることは少し考えにくい。が、都農町がどれだけ発展しても、貴重な職守の記録としてこれからもこの慰霊碑は残していってほしいと強く思った。（市谷）

①菊栽培農家の方の話



10時ぴったりに音楽のようなものがなり（画像④）、ビニールハウスの中から外国の方たちが数人出てきた。その女性の方々は、いわゆる出稼ぎという形で都農町にやってきたそうだ。そのことについて「お金が欲しいからよ。」と恥ずかし気に我々に話してくださった。

その後、その女性らを通じて雇用主の日本人男性の方にお話を伺うことができた。ここで栽培している菊は宮崎、福岡、広島などに出荷しているという。都農町は菊の栽培に通じているわけではないが、一年中救済しており、水を多く使用するという。その男性自身は18歳から農業に従事し始めたそうだが、都農町は農業に従事する若者がほほい少ないという。そこで8年ほど前からインドネシアや中国出身の女性を主に雇い始めたそう。彼女らは実習生で、大体3年ほどで入れ替わり、若く日本人より賃金を抑えられるため雇用しているとおっしゃっていた。しかし、言葉が通じないという問題や宗教的慣習である断食の習慣などの影響で雇用するうえで困ることも多いという。また、近年発生件数が増加している水害が発生した場合はビニールハウスが浸水してしまう問題もあるという。一方で都農町は自然が日当たりがよく農業に向いていることがいところだそう。今後に都農町にこれから求めることは何かを伺うと、女性や農家に対する支援を強めてほしい、補助金などの制度を見直してほしいという意見を仰っていた。

都農町をよりよくしていくために雇用という面で若者呼び寄せたり、女性や留学生が働きやすい環境を作ることが必要なのではないかと思った。（松尾）



12時頃に近くを通りかかった際にも音楽が聞こえたので、恐らく休憩の合図にしているのだろうと考えた。

②子鹿を発見！

菊栽培農家さんにお話を伺った後、自動車に乗った男性に声をかけられた。その男性は7月にあるウナギ釣りイベントに備えて夫婦で川の下見に来ていたそうだが、下見の最中に川に落ちた子鹿を見つけたという。一人で引き上げるのは大変だから学生に手伝ってほしいとのことだった。結果的にはその男性が子鹿を抱えて山のほうに返してくれた。私は野生のシカをあまり見たことがなかったので驚いたが都農町の山の中では当たり前の光景だという。なにか協力できることがあればよかったが何もできなかったの申し訳ないなと思った。しかし、その申し訳なさと同時に普段はなかなか見ることのできない野生動物の生態を間近で見ることができ、都農町の自然の豊かさや生態系の豊かさを改めて感じることもできた。とても良い経験になった。下は救出直後の鹿と川の写真である。小さくとても可愛らしく、鳴き声も想像とは異なり高い声で鳴いていた。しかし、その後ニラ農家さんにシカの被害について話を聞き、複雑な気持ちになった。

人間と動物がお互いのデリケートに干渉せずに共存していく道はないのだろうか考える機会になった。また、今後フィールドワークをする際にも、学生であることが一目で分かるような格好であれば、地域住民の方により受け入れてもらいやすくなるかもしれないと思った。（大野）



感想

私たちが担当したエリアは都農駅から離れている分範囲が狭かったが、お会いしたほとんどの方が快くお話を聞かせてくださった。この事実より、都農町民は親切で友好的な方が多いと思った。実際に、お話を伺った約10人全員に「都農町の魅力は何ですか？」と尋ねたところ、半数以上の方が「人があたたかくて優しいところ」と答えられ、私たちもその答えに納得した。インタビューでもう一つ必ず伺った事項は、「都農町に改善してほしいところはどこですか？」というもので、これも、「鹿の駆除と洪水対策」とほとんどの人の答えが同じだった。私たちが訪ねた範囲は狭く、聞けた声も多くはなかったが、それでも住民が思う魅力や求めていることに一貫性があるように感じた。都農町の方々とお話をする中で特に印象的だったのは、菊農家の方が、都農町のふるさと納税額が全国上位だった時期は援助が厚かったが、年々減らされているとおっしゃっていたことだ。都農町と言えばふるさと納税のイメージが強く、勝手に今も援助が厚いのだと思っていたため、現状に衝撃を受けた。また、宮崎は天候に恵まれている分、農家への支援金・補助金が出る機会が少ないため、経営が苦しいということも初めて知り驚いた。周りから見たら恵まれているように見える地域にも、住民にしか分からない苦悩や困難があるのだと気づいた。このフィールドワークを通して、私たちは地域学部の学生として、第一に直接住民の声を聞き、地域に寄り添った取り組みをすべきだと思った。地域を外から見ただけでは、本当に求められていることに応えられないため、自分の足で実際に現地に行くことでしか得られない情報が多くあるということを学んだ。（市谷）